

国東半島農業研修 －フィールドワークの実践報告－

丸 橋 珠 樹*

Student Field Trips on Recent and Historical Agriculture in
the Kunisaki Peninsula, Oita Prefecture, Japan

Tamaki Maruhashi

1 はじめに

「国東半島の農業の今と歴史を訪ねて」の名称で研修旅行を始めたのは2006年であった。以後、2019年まで連続して14回実施し、コロナでの中断2年間を挟んで、2022年に最後の15回目の旅となった。その始まりの経緯、研修内容、学生の学びなどについて、まとめたのが本稿である。

このプログラムを始めるにあたって三つの背景があった。一つ目は自然科学分野でのフィールドワークによる自然科学科目の展開、二つ目は武蔵大学と大分県国東市（旧武蔵町）との1991年にさかのぼる長い交流の歴史、三つ目は巨大都市生まれの学生たちが農業という視点から地球環境問題について考える手がかりをつかむの三点である。

このプログラムの大きな特徴は二つある。科目ではないのでゼロ単位で全学の学生が参加可能、もう一つは「そんな長い旅はしたことがない、何をするのですか？」と言われることの多かった四泊五日という長さである。この15回の実習には91名の学生が参加し、今も交流が続いている方々もたくさんいる。卒業論文指導ゼミを持つことのなかった私にとっては、学生と身近に出会う場となった。

* 武蔵大学名誉教授

ともに自然科学教育におけるフィールドワークの大切さを実践してきた薬袋先生が退官するにあたり、この教育的実践についての記録を残しておきたい。

2 自然科学科目におけるフィールドワークの展開

薬袋さんが1996年10月に武蔵大学人文学部教授に就任し、主に化学系科目を担当することとなった。私は、その10年前1986年に武蔵大学に生物学担当として職を得ていた。以後、武蔵大学での教育活動を終えた2023年まで、大学9号館で物理担当の池田さん、薬袋さんと研究室が隣り合わせだった。当時の自然科学専任教員3人は、経済、人文、社会の3学部で構成されている文科系大学での自然科学教育の在り方について、何度も議論を重ねてきた。

自然科学分野の大きなカリキュラム改定は2010年だった。大学全体で、大幅なカリキュラム改定が実施され、3学部共通の基礎科目が設けられた。この基礎科目群の特色は、6分野すべてに講義科目と実践科目を配置したことである。当時の基礎教育センター自然科学が主として担当したのは、基礎科目D群の自然と環境およびE群の心と体分野の科目であった。この自然科学の科目群の教育目標は当時の自己点検評価書において、以下のように述べられている。

地球温暖化や生物多様性などの全地球規模での新しい枠組みが次々と作られ、困難に直面しながらも、人類全体の問題に積極的に取り組み、未来の世代に負を押し付けないという共通認識が共有される現代である。これらの基盤となっているのは、宇宙や全地球史に代表されるような、自然科学諸分野の智の融合と協同作業である。したがって、武蔵大学は文科系大学だからこそ、あるいは、高等学校では自然科学の学びの量が僅少だったからこそ、自然科学の素養を教授することは、現代社会の要請に直接応えるものである。また、仮説検証型の自然科学的研究方法をフィールドで体験し実践することを通じて、課題解決能力や社会人基礎力を身につけることができる。

このとき実践科目として新設された科目が「武蔵環境フィールドワーク」「自然科学集中講座A」「自然科学集中講座B」の3科目であった。武蔵環境フィールドワークは科目名が示す通り、武蔵大学の自然環境を探究の素材として、化学、

物理、生物の3人の専任教員がリレー形式でカリキュラムを構成した。調査や実験と講義とを融合させ、武蔵大学とその周辺の自然環境の変遷を歴史的視点からたどるとともに現在の巨大都市環境の特色を探索することとした。教育効果と調査・実験設備の制限から、履修者数は約30名と制限し、単位数も演習科目の考え方を取り入れ2単位科目としてこれまで運営してきた。

江古田の武蔵大学の自然環境を対象とする「武蔵環境フィールドワーク」と並んで群馬県赤城山をフィールドとしたのが「自然科学集中講座A」であった。赤城山には武蔵学園の宿泊施設赤城青山寮があり、集中授業を展開できる好条件となっていた。この科目も化学、生物、物理の3分野の教員が協同して、3分野の野外調査を実施し、最終日には各班発表を行うという形式で実践した。

赤城山植物野外実習の元となった科目は通称「金華山実習」であった。授業が終了した後12月末に四泊五日間、宮城県牡鹿半島の先にある金華山島で調査実習を行った。この島には金華山黄金山神社以外に住民は居住せず、宮城県サル調査会が利用していた営林署小屋で合宿した。学生と一緒に食材、灯油とガスボンベなどを船着き場から小屋まで運び上げるのには大変な労力を要した。当時の学生たちは皆元気に合宿生活と調査活動を楽しんでくれていた。この島では、宮城教育大学伊沢さんと学生たちによる長年月の研究活動の結果、ニホンザルが人づけされていたので、生態学の実習サイトとして好適であった。ただ、気温が氷点下にながたり、吹雪に見舞われたり、まさしく冬の調査であった。

もう1つの「自然科学集中講座B」は通常の隔週実験科目では行えないが、集中授業形式だと可能な実験や観測などを行う科目とし、年ごとに化学と物理担当教員が交替しながら実施した。この2つの科目の単位数は実験科目を集中授業形式で実施するため従来の単位認定基準を踏襲して1単位科目とした。

3 武蔵大学と国東市（旧武蔵町）との30数年間の交流

1991年から2024年まで30数年続いた交流は、以下の3期に分けることができる。こんなにも長く交流が続けられていたことを知る人は、学内に少なくない。文末に付随資料として、当時の学生生活課大中さんがまとめた第1期と

第2期の詳細な交流記録を添付しておく。多くの人が武蔵を去るなか、このような活動があったことを記憶に留めておきたい。以下、職名には当時と入れないで記述した。

1. 第1期 1991～2000（10年間）

武蔵サミット形式「武蔵」にゆかりある市町村、団体、個人などで毎年、開催地とテーマを替えつつ文化交流事業を展開

2. 第2期 2001～2005（5年間）

武蔵町と武蔵大学との文化的交流

人文学部故宮本袈裟雄ゼミによる3年間にわたる民俗調査の成果を『武蔵町の民俗』[1]として出版、武蔵町主催のなのはなマラソン大会などのイベントへの参加、武蔵町の農産物を白雉祭で販売、武蔵大学のサークル野良塾を中心とした武蔵町での農業研修旅行

3. 第3期 2006～2022（17年間）

4町の合併後、新国東市との交流、丸橋が引率する四泊五日の「国東半島の農業の今と歴史を訪ねて」（略して国東半島農業研修）研修旅行の開始、第2期の研修地を拡大し、国東市だけでなく、田染・宇佐・安心院を日程後半に組み込む

交流の始まりは本当に偶然のことであったと伝えられている。1991年に大分県で開催された全国生涯学習フェスティバルで正本秀雄武蔵町長と武蔵大学人文学部林義樹教授が同席し、同じ『武蔵』ということで交流がはじまった。平成5年（1993）の夏には、武蔵大学の教職課程学生が「町おこし」をテーマに調査活動を行い、11月には正本秀雄町長と桜井毅学長が懇談し本格的な交流が始まった。翌平成6年（1994）から『武蔵』の名にゆかりのある、全国の個人、諸団体、企業等の参加する武蔵サミットが大分県武蔵町、武蔵工業大学同窓会と本学間で毎年交替で開催され、続けて6回実施された。

第2期では、武蔵町魚返敬之町長からの提案を受けて、武蔵サミット形式は終了し、武蔵町と武蔵大学の間での文化交流事業として継続していくこととなった。武蔵町からは武蔵大学白雉祭での物産販売、武蔵大学からは武蔵町で開催されて

いた、なのはなマラソンへの学生参加、農業体験への学生派遣が行われた。特筆されることとして、人文学部宮本袈婆雄ゼミによる武蔵町での民俗演習調査が2003年から3年間連続して行われ、『武蔵町の民俗』が出版された。

第3期は関係者の継続への協力と新たな歴史研修の追加によって15回もの旅を行うことができた。2006年には平成の大合併が実施され、大分県国東半島では国見町、国東町、武蔵町、安岐町の4町が合併し、国東市が誕生した。そのため、武蔵町独自で行ってきた武蔵大学との文化交流事業は難しくなり、今後の交流をどうしていくかが、課題となった。

そのころ私は学生部長をしていて、この文化交流事業で町長や町役場の方々、白雉祭で農産品販売やねぎ餃子の調理担当をしていた長廣さん夫妻たち農家の方々と知己を得ていた。第2期の最終年には、学生部長として学生を引率して武蔵町での農業研修旅行も行っていた。

武蔵町での農業研修は、形を変えても継続したいと申し入れ、受け入れ農家だった長廣さんも継続しようと受け入れてくれた。変更点として、受け入れ人数は8名程度、長廣さんが暮らしねぎを栽培している丸小野公民館で合宿する形に変更した。こうして、現学生支援センター主催研修旅行「国東半島の農業の今と歴史を訪ねて」となり、武蔵町での農業研修に加えて、豊後高田市田染と宇佐市安心院での歴史研修とを組み合わせることとなり、このタイトルとなった。

4 国東半島農業研修と地球環境問題

地球規模で考え、地域で行動する（Think globally, act locally.）は、地域で考え、地球規模で行動する（Think locally, act globally.）と表裏一体である[2]。今年2024年も地球温暖化を実感せざるを得ない猛暑の夏となった。多様な要因が重なっているが、野菜などの食料品の高値が続き、農家は生育管理に苦労しているとの報道が相次いでいた。また、豪雨災害もしばしば発生している。

地球生態系のなかでどの動物も生きるために植物や動物を食べ、体重に応じた基礎代謝量、消費エネルギーを計算できる。現代人は、快適な生活と大量生産大量消費を維持するため、化石燃料を燃やし、石油文明ともいえる経済システムを

拡大させてきた。食べ物以外の全てのエネルギーも含めて基礎代謝量とすると、人1人は、巨大なゾウの基礎代謝量に匹敵すると試算されている。人は、地球に負荷をかけている生物である。

研修タイトルにある「農業の今を訪ねる」では、人の生存に不可欠な農業生産の現場を訪ね、誰がどこで、どのように生産し、どのように流通しているかを体験し、生産者の視点から食料問題を考える端緒を得る機会となった。農業は一番国際化されていないようにも思われるが、例えばねぎの種の袋を見ると、輸入国がチリやイタリアだったり、酪農では精子が国際的に取引され、今年的人工授精はどの種牛にするかカタログをめくるとのことだった。酪農家清末健一さん滋さん親子、同じ地域の厚田健太郎さんの牧場で研修させていただいた。農家の視点は、世界全体の農業問題を考える視点とも関連している、いわばフラクタルな構造を持つことを理解して欲しいと願っている。

もう1つの「歴史を訪ねる」は、米の国日本、田んぼとは何かを歴史的な視点から考えることである。水田の水管理は、ムラの社会の根幹であり、水を配分する水路体系は歴史の産物である。国東半島には今から1,000年程前、平安時代1,156年に作られた平田井堰と平田井路が当初140町歩の水田開発を可能にし、今では1,540ヘクタールの宇佐平野を潤し、大分県一のコメ生産地帯となっている[3]。少ない水を賢く使い、平等に分ける原則に則った社会の在り方を知り考えることで、現代の農業生産システムと昔のムラ単位の農業生産システムとを対比し、農業問題を考えるフラクタルな視点を獲得できる端緒となる。

フラクタルは「自己相似性（部分が全体と相似な形を有している）」という性質を有する構造である。抽象的な数学概念だが、自然界には、リアス式海岸、入道雲、木の枝などにもみられる。我々は、大スケールと小スケールで比べると、働いている原理や対応方法が違うように感じることもある。スケールによる違い、過去と今との違いを捕えることも大切だが、2つは相似している点にも注意を払い、細部を見る観察力と全体を俯瞰する目を涵養して欲しいと願っている。入道雲は、フラクタルの1つで、細部の構造と大構造が相似している点を確認できる。



フラクタルの事例、入道雲、2024年8月17日18:34撮影丸橋。

5 研修地国東半島の豊かな文化と歴史

研修地である国東半島は、(1) 二つの国宝、(2) 世界農業遺産、(3) 重要文化的景観の三つの特色がある。国宝である富貴寺と宇佐神宮には、ほぼ毎年訪れた。ある年の研修では、富貴寺大堂で和尚さんが読経をしておられ、終わるまでじっと阿弥陀如来像前で聞き入った後、思いがけず和尚さんから直接お話を聞くこともできた。八幡総本宮宇佐神宮の本殿も訪れた。千年前、この神社の神職宇佐公通が平安時代1156年に作ったと伝えられる平田井堰も必ず訪れた。神のお告げで箱が流れ着いた場所に堰堤を築き、箱から出てきた蛇たちが移動した経路を水路としたとの逸話が残されている。駅館川に築かれた大きな用水ダムの規模とそれが千年間、宇佐平野に灌漑用水を送り続けていることに歴史の重みを感じる場所である。

国東半島は世界農業遺産「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水

産循環システム」である。この遺産サイトには、以下のように説明されている[4]。「世界農業遺産（GIAHS/ ジアス）とは、食料の安定確保を目指す国際組織である、国際連合食糧農業機関（FAO）は、グローバル化、環境悪化、人口増加の影響により衰退の途にある伝統的な農業や文化、土地景観の保全と持続的な利用が図られている地域を「世界農業遺産」に認定しています。世界的に重要な農業地域を次世代に引き継ぐため、2002年に開始したプロジェクトです。」

研修ではこの遺産認定を推進した林浩昭さんたちが活動している七島蘭学舎で世界農業遺産指定の経緯とその意義の講話を聴き、七島イ工芸家岩切千佳さんから手ほどきを受け、小さな思い出の作品を作るのが定番の研修項目であった。林さんとともに遺産指定の立役者である、APU アジア太平洋学部准教授ヴァファダーリ・メッヘリージ・カゼムさんに、研修参加学生たちがお話を聞きに行ったこともあった。

主要な研修地である田染荘は重要文化的景観に指定され、かつて宇佐神宮の所領であり、富貴寺大堂、熊野磨崖仏、真木大堂木造大威徳明王像などがある。文化財保護法で文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義されている[5]。

田染荘は、現在の天皇が皇太子時代に訪れ、第1回アジア・太平洋水サミットでの開会式における皇太子殿下記念講演で言及された地である[6]。以下は、そのときの講演録からの長い引用だが、田染荘の特色と今へのつながりがまとめられている。

まず「足りない水」について見てみましょう。これは、かつて宇佐神宮の重要な荘園であった田染荘（たしぶのしょう）の田園風景です。この水田地帯は、何世代にもわたる人々の努力によって造られたものなのです。雨引神社（あまびきじんじゃ）の湧き水を地形を利用しながら緩やかな曲線を描いて導水し、上の田から下の田へと行き渡らせています。その結果生まれたのがこの棚田です。この美しい景色は長年にわたる人々の知恵と汗の結晶とも言えるでしょう。

幸いなことに、当時の荘園村落の姿が今に残されています。また、付近には、富貴寺や真木大堂、熊野磨崖仏といった国東半島を代表する文化財が残されているなど、歴史的魅力に富んだ場所となっています。

とはいえ、人々はこの地を美しく見せようとして棚田を造り上げたわけではありません。そこに存在する土地を、その自然条件の中で最も理にかなった形で利用しようと努力した結果なのです。このような厳しい地形条件の下で、こうした棚田を維持していくことは、決して容易なことではありません。しかし、良好に管理された棚田は、作物の豊かな実りをもたらすだけでなく、大雨の際にはため池としての役割を果たし、下流に広がる平野の洪水を軽減してくれることにもなるのです。また、田に引かれた水の一部は地下に浸透し、地下水となって下流部を潤します。小さいながらも、人々の手によって新たな水循環が作られることになるのです。

6 参加学生と研修旅行報告書の発刊

この研修旅行は学生支援センター（かつての学生部）主催で、現地引率者は丸橋という形で第3期から続けられてきた。応募受付時期になると、武蔵大学の学生は全て参加可能であると広報し、新入生には大学から送る諸書類の一つとして「新しい体験が新しいあなたを創る」とうたったチラシを封入した。

2006年は今のスタイルでの研修旅行初回だった。人文学部の大学院生3人に無理を言って参加してもらい、旅行手配、保険手配、現地農家での体験作業、市長をはじめ市役所職員との対応、歴史パートでの現地踏査の手順、宿泊などについての試行的研修旅行を実施した。

この経験を踏まえ、2007年以降、学部学生への公募によって参加者を決定した。当初、最小催行人数はどうするか？ 応募者多数の場合の選考方法は？ などと心配したが、表1にあるように、参加者総数は14回の研修旅行で88名で、最大数は10名、最小数は3名で、平均すると6.3人で安定して推移した。4月中旬に実施したガイダンスには多数が参加したこともあるが、実際の応募者が多くて選考するということとはなかった。ただし、コロナ後の2022年の最終旅では、数年に渡

る閉塞感の直後で、学生たちのフィールドワークへの期待が高まっていたためだと推察されるが、24名の応募者があり、参加希望レポートによる書類選考後、面接によって7名を選考した。

2007年の報告書には学部学年が記載されておらず、データはないが、学部別参加者数は、経済学部から20名、人文学部から39名、社会学部から23名で、人文学部からの参加が多かった(表1)。男女別でみると女性65名、男性23名で、武蔵大学の性別構成からすると、少し女性に偏っていた。学部と性別でみると、人文学部女性が33名で大多数で人文男性は6人、社会学部では女性18名、男性5名であったが、経済学部では男女とも同数10名であった。

表2からわかるように、学年別でみると1年生が27名、2年生が30名、3年生が16名、4年生が9名であった。1年生と2年生では、女性が8割を超えているが、3年生と4年生では参加者数が少ないので特徴といえるか問題であるが、参加男女数にあまり差はなかった。

表 1 各年度の学部別と性別参加人数

回数	年度	院と不明	経済	人文	社会	総数	女性	男性
1	2006	3 *				3	2	1
2	2007	6 *				6	4	2
3	2008		4	3	3	10	9	1
4	2009		2	4	1	7	4	3
5	2010		2	1	4	7	6	1
6	2011			3	3	6	4	2
7	2012		2	2	2	6	4	2
8	2013		1	1	1	3	2	1
9	2014		1	5		6	4	2
10	2015		1	3	2	6	5	1
11	2016		2	4		6	6	
12	2017		2	3	1	6	5	1
13	2018		1	5	1	7	4	3
14	2019		1	3	1	5	3	2
15	2022		1	2	4	7	5	2
総計		9	20	39	23	91	67	24

* : 2006 年は人文大学院生 3 人、2007 年度 6 名は記録が不確かで性別は判明したが、学部別分類ができなかった。

表 2 学年別の性別と学部別参加人数（2008 年以降 13 回の分析）

学年	女性	男性	総数	経済	人文	社会
1	23	4	27	4	15	8
2	24	6	30	8	11	11
3	9	7	16	5	9	2
4	5	4	9	3	4	2
合計	61	21	82	20	39	23

この研修では毎年必ず報告書を印刷し、現地で交流した方々に郵送した。学生にはお礼の手紙やはがきとは別に、この研修ではどのような事柄を現地で体験し考え学んだかをまとめたレポートを作成するのは、お世話になった方々への礼儀である。また、研修前に提出した参加希望レポートと研修後の事後レポートを合わせることで、研修全体を振り返り、今後の大学での学びに活かす手がかりとした。

2005年レポートは第2期最後の農業研修であり、2006年レポートは新研修の試行であった。この2つの経験を通じて、どのような形式で全体レポートを作製したら良いかを定めることができた。作成した報告書16冊の総ページ数は1,018ページであり、毎年平均すると約64ページの冊子となった。発刊時期は10月から12月くらいであったが、原稿提出が遅れる学生がいて年を越すことも稀にあった。

毎年の参加者平均は6.3人であり、写真アルバム部分などをのぞくとA4サイズレポートで大体40ページ余りを作成することになった。1年生と2年生にとってはレポートを作成する良い機会となっていた。編集は多数の写真を配置する冊子なので、丸橋が主に行った。印刷されたレポートを手にする学生たちには、手渡し時に「親御さんや兄弟、友人にも見せなさいよ」と声をかけた。印刷冊子を手にとると、自分の成長を感じとれ、他者からの評価や批評を得る良い機会となったに違いない。

多くの学生との交流機会を作ってくれたこの研修旅行は、学生自身がつくり上げたものであり、学生から学ぶこと、教えられたことも多かった。巻末には各年度の参加者リストと集合写真、そして、pdf版レポートへのアクセスQRコードを添付しておく。



長年刊行し続けた国東半島農業研修レポート16冊。既に手元に保存冊子がなくなってしまった年のレポートは欠けている。

7 国東半島農業研修の10項目と1年間

この研修を続けるにあたって、学生に、以下の三つの視点を繰り返し訴えてきた。(1) フィールドワークは学びの基礎、(2) 世界はフラクタルな構造を持つ、(3) 理性の眠りは妖怪をうむ。小は大を兼ねるという諺があるが、フラクタルはまさしくこれにあたる概念である。細部の構造は、大構造と同じ構造を持つのである。以下は、三つの視点から研修のねらいと希望を具体的に10項目にまとめたものである。研修旅行前にはこの資料を配布し、研修を通じてこの中のいくつかを自分のものとして欲しいと準備、実行してきた。

研修旅行の10項目

1. 自ら参加し「自ら調べ考える」学生が学びたいと思う場を提供する。
2. 研修後の大学での学びへの強い動機付けに寄与する。
3. 「あんな人になりたい」人生のモデルとの出会いの機会を提供する。チャレンジする人物の情熱、その道の達人の人生の軌跡、信念を持つ人物と語る。
4. 「良い人は皆親切だ」と社会への安心感を持つ。
5. 「自然からしか学べないこともある」自然との関わりに謙虚さが不可欠だと気づく。
6. 時と場所を超えて人類社会はフラクタルな構造を持つことを理解し、地域でも世界でも行動できる人となって欲しい。
7. 人と語り合い、人を説得し、納得させる、言葉の力を磨いて欲しい。
8. 家族や友人に自信をもって語れる体験をして欲しい。
9. 「感謝と挨拶、協力と交流、責任と自覚」をもつ学生になって欲しい。
10. 生涯の新たな友人をフィールドワークから得て欲しい。

国東農業研修旅行の1年間

- 3月：入学生へ研修パンフレット封入、武蔵大学ホームページ広報
- 4月：前年参加者によるガイダンスと参加者確定
- 5月～7月：事前学習ゼミ、毎年学生の希望を聞きテーマ設定、夕食会

- 9月1日から5日：現地実習、日程は毎年固定
- 9月中旬：学生から研修でお世話になった方々へのお礼状、丸橋から写真と礼状送付
- 9月下旬～10月：報告書の編集と印刷、発送
- 11月：白雉祭での「ねぎ焼きイベント」実施

この研修旅行では1年間の間、数多くのカリキュラムが連続している。通常の90分講義15週だと22.5時間となるが、学生たちはひょっとすると数倍以上の時間を費やすことになる。現地研修だけでも、朝7時起床夜10時就寝なので1日15時間、これが四泊五日だから、若いとはいえ後半には疲れが溜まってくることも多い。

レポート制作については、以下のように工夫した。まずガイダンス後、参加希望理由書を書くにあたって、前年度のレポートを熟読することを課題とした。こんなレポートを研修後作成するのだと明確なイメージを持つことができるよう配慮した。

現地では、全ての参加学生がお話をできる限りことば通り記録し、研修内容のメモを取る。レポート担当割り振りは、最終日の、丸橋がレンタカーを運転して現地解散のため大分空港へ向かう移動時間に、車内でわいわい語り合い、希望を募って決めるスタイルとなった。自分が書きたいというパートをしっかりとお互いに確認することもまた良いレポートを協力して仕上げる始まりとなっていた。

事前研究もまた大切な要素である。お互いに面識のない学生なのでテーマを自主申告し、数班に分かれて事前研究発表を行うことで、お互いを理解することができる。応募時には簡単な希望理由書を提出してもらうが、事前研究が終り、これから現地実習というときに「研修前レポート」を作成した。現地の指導者と関係者にレポート集として送付し、今年はこんな学生がこんな思いでくるのかを知っていただく機会とした。

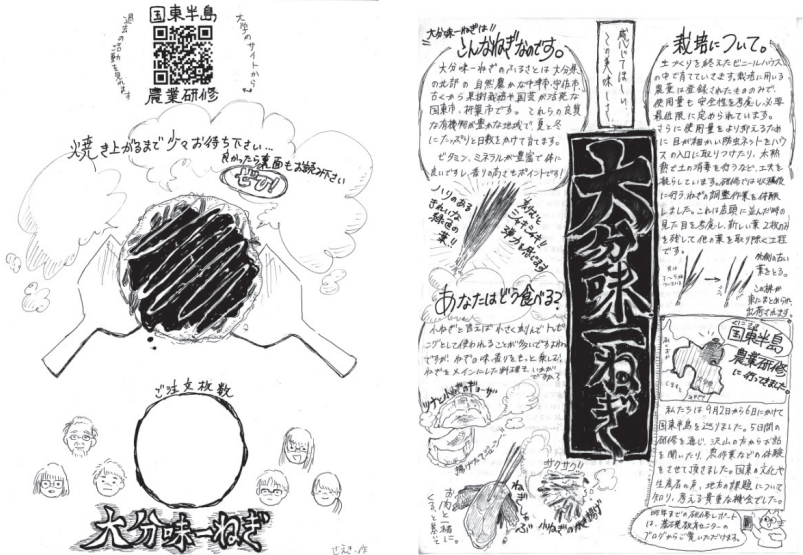
もう1つの柱は白雉祭でのねぎ焼きイベントである。大分味一ねぎを生産している農家で農業体験をさせていただくので、大分味一ねぎの味の良さと料理法を宣伝することを目的としたイベントである。小葱は薬味として少量しか利用しな

いことが多いので、お好み焼きの具材として好適であることを広く知ってもらい、消費量と料理メニューの拡大を宣伝した。

大分県宇佐市は味一ねぎの大生産地である。地域では、味一ねぎを利用した多種多様な料理を幾つもの店が競って提供するという販売戦略を立てている。そのメニューの1つがねぎ焼きである。このメニューを開発した大規模ねぎ生産農家大窪さんから直伝で作り方を教授していただいた。それだけでなく、美味しく焼くためには良い鉄板が不可欠だとのことで、大型コンロ2つと厚さ9ミリ重さ60キロの焼き鉄板を寄贈していただいた。なんとこの鉄板は、造船所で船建造に使われるものだった。これをブロックに載せて焼き場とした。白雉祭のなかでも人気メニューで、毎年、地域の方や教職員学生たちにも喜んでいただいた。

材料の調達購入、下ごしらえ、調理、販売会計、宣伝、会計処理などの一連の過程から、バイト代金を出せる食品店の売り上げとはどんなものかを知る社会経験の場となった。売上枚数は300枚を超え、1日で素材の味一ねぎがなくなってしまうのが通例だった。チケットは、この地域の観光パンフレットを使い、並んでいる間に読んでいただいたり、手作りのチケットだったりした。研修旅行の紹介パネルを並べたテントで、学生とお客さんが研修旅行のことを語り合い、知っていただく機会となることを目指した。

もう一つ、国東半島農業研修に参加した卒業生たちも食べに来てくれて、思い出話と交流に花が咲いていた。学年を越えての交流がつながることは大切で、国東市職員が突然来訪してくれたりもして、研修旅行が人とのネットワークを拡げる機会となっていた。販売余剰金を得て、報告書を手にして、研修旅行全体の打ち上げ会を開催する資金源ともなった。



2019年の販売用切符表面には武蔵大学ホームページの国東研修のQRコードと皆の似顔絵。裏面は活動の紹介とねぎ焼きや大分味ねぎの美味しいメニューを紹介(佐伯さんデザイン)。

8 田染荘、二人の講師と農家民宿おふじ

ところで研修旅行のタイトルである「国東半島の農業の今と歴史を訪ねて」の始まりのエピソードを知っていただきたい。私が武蔵町との交流事業を引き継ぐことになったのは2006年だった。ちょうど武蔵町も含めて4町が合併して新しい国東市ができるにあたって、交流事業を継続すべきか、区切りを入れるべきか迷っていた。それまでは、農たい（農業をしたいという意味）の学生団体を中心に、3年間各年18名、20名、27名もの農業体験だった。農業体験といっても、数が多いので見学程度で、終われば観光地を訪ね、宿泊は武蔵町宿舎美郷を利用し、期間も2泊3日だった。

もう少し学びの深い研修にするため、期間を四泊五日に長くすることと、歴史的視点から今の農業を見直すとの二つの粗い目標を設定した。しかし、具体的な方法や指導してくれる人も手探りだった。唯一の手掛かりは2005年11月に出版されたばかりの『六郷山と田染荘遺跡－九州国東の寺院と荘園遺跡－』という本

だった[7]。この本の著者櫻井成昭さんに、当たって砕けろで、休館日だった月曜日、それもアボなしで大分県立博物館を訪ねた。「櫻井さんにお会いしたいのですが」「今日は休館日ですが来ていますので待っててください」ひとしきり研修の趣旨を説明し、歴史を訪ねての部分の講師をお願いしたところ、意外にも二つ返事で「いいですよ」「え？でもなぜ？」

櫻井さんがおっしゃるには「実は武蔵大学の瀬田勝哉先生のような学者になりたいと思っています。武蔵大学の方とこうしてお会いできたのも良い機会、引き受けます」とのことだった。「研修場所は田染が最適で、田染にお住まいの河野了先生に会っておいて下さい」とのことでした。博物館を後にして、紹介していただいた河野先生を田染に訪ねた。同じように研修の趣旨をお話し講師をお願いしたところ「はいお手伝いします。以前武蔵の先生をお助けしたこともありますし」と、またまたの二つ返事だった。河野さんが以下のようなエピソードを語ってくれた。

武蔵大学の瀬田先生を案内したことがあるのですよ。夕日観音の近くでうろうろしている方がいたので、何かお手伝いすることはありますか？と尋ねると、福岡での学会を機に、日本史研究の新しい潮流がうまれている場所を訪ねてきたが、地理不案内で迷っていたとのこと。案内しながら色々話をしているなかで、武蔵大学の瀬田教授だと自己紹介されたそうです。田染荘での研究成果について、熱心に沢山質問され、詳しく勉強している学者だなあと感心したとのことでした。

櫻井さんの若い時代のフィールド研究を支えたのが田染で地域史を長年研究していた河野先生だった。この地に生きる人でなければ分からない、地域に伝承された歴史を詳細に掘り起こしている在地の研究者だ。河野先生は、鎌倉時代の文書に記された地名は「この場所この地点のしこ名です」と今と歴史を結ぶ働きをした立役者だ。地域に残された小さな地名、しこ名は、人々の自然認識、出来事の記憶、いつしか由来が途絶え変化してしまって誰も説明できない不思議な地名もある。研究チームは現代の地図に、大字、小字、しこ名などの地名と区界を定め、神社や祠など信仰に関わる場所を記録した。さらに、棚田の田越し灌漑の水口水尻の位置を田一枚一枚ごとに記録し、地域のため池、小さな井堰も残さず数

百の井堰の位置と名前、用水路体系を地図化した。

鎌倉時代から800年ほどの歴史が深く刻まれ、今も美しい棚田が保たれているのが田染小崎地区である。研修学生を前に、河野先生は「ここは山之口という場所です。鎌倉時代、ここで数人殺された戦いが起きたと文書に残されています」と案内してくださったりした。学校の先生をしておられたので、この地区の人々は皆教え子とのことだった。武蔵大学名誉教授瀬田先生のお陰で、櫻井さんと河野先生のお2人を現地踏査の講師とすることができたのだった。

現地踏査ではお二人に案内、解説していただきながら、田染荘の奥深さを学んだ。文化財も当たり前だが、地域にあって人々の身近なものだった。延寿寺境内には、室町時代応仁2年(1468)の銘文がある石殿がある。県文化財を前に、石段に並んで櫻井さんの解説を聞いた。「若い時代にこの文化財の実測図を描いたことがある。ここにまだ赤い色が残っているのが見えますか？」境内隅には納屋みたいな小屋があって、ゆがんだ戸をこじ開けて「ここにあるのは平安時代の一本造りの仏像たちです。厨子に入っているのが見えますか？厨子が仏より小さかったので仏さんの足を切って入れてあるのがわかりますか？」「え！足を切って入れた？本当だ」

河野先生からはびっくりのエピソードも聞いた。真木大堂の収蔵庫には、多数の国重要文化財が巨大なガラス越し保管、展示されている。収蔵庫の隣に小さなお堂がある。「お隣の仏たちはもとは皆ここに押し込んであったのです。わたしたち地区の子どもはこれのお堂で、木造大威徳明王像にまたがったり、仏像の間でかくれんぼしたりしたものです」

ある年、台風接近のため田染荘を踏査できなほどの豪雨になったことがあった。河野先生のお宅で古文書を読んだのも懐かしい思い出。島原藩領田染組村絵図は、元禄2年(1689年)の記録文書である。小崎村、河野先生の住んでいる地区の明細帳を櫻井さんの指導で読み進めた。学生にとって江戸時代の古文書を読むのは初めてだ。「明細帳は田畑の詳細な面積、ムラ人数、牛馬の頭数などの統計記録ですから数字が判読できれば大体読めます」怖がらずに皆で読んでみれば、これが四でこれが五と読み進めることができた。

「村絵図では、道を赤、川や水路を浅葱（水色）、田を柿色（柿渋の濃い茶色）、畑を黄色で色分けしており、周辺の森林、寺社、岩峰なども描き分けてあります。今では名所となっているような場所もしっかりと描きこまれています[8]」これらの残された絵図をつなぎ合わせれば、江戸時代の航空写真になる。現代の地図にこれらの絵図情報を描き込んだ大きな地図を作ったのは櫻井さんたちの研究チームだった。今からわずか50年足らず前の、1976年撮影の航空写真には小さな谷奥まで至る所に棚田が残されている。この絵図と地図と写真とを対比すると、畑や森の姿は様変わりしているが、田んぼの姿は元禄時代とほとんど変化がないことが分かると指摘され、学生ともども納得した。水と田こそ、人々の暮らしと歴史の骨格なのだと得心できた。

もう一つ、櫻井さんの雨乞いの話はとても印象的だった。「雨乞い祭は聞いたことがあるでしょ。雨乞いすれば必ず雨が降るのです」「本当ですか?」と疑い深い学生たち「ムラで雨乞いをして降らなかったら、近隣のムラがまとまってもっと大きな雨乞い祭りをを行い、まだ降らなければ国全体がさらに大規模な雨乞い祭りをする。こうして何日も何度も祭りを巨大化しながら続ければ雨が降る。というより雨が降るまで続けるわけです。神は必ず人の願を聞き入れてくれるという確信が、かつての自然と人との関係の本質なのです。だから水に関わる場所に神社を建てて祀るのです」

歴史の研修地田染荘では、河野忠臣、洋子夫妻が営んでいる農家民泊おふじに連泊した。田染でも最も奥まったおふじという集落にボツンとあり、携帯電話の圏外、カーナビには道が表示されないと学生たちは驚いていた。でも自動車道路が四通八達する以前、明治から終戦後の高度成長期まで、この集落は田染から日豊本線への最も重要な往還で多数の荷馬車が行き来したのだった。

玄関の愛犬リキが鳴くと「イノシシが山を通っているのだらう」と野生動物が身近にいる環境だった。庭先には畑と鳥小屋があり烏骨鶏の美味しい卵かけご飯が朝の定番だ。こんなエピソードを話してくれた。小学生の修学旅行で来た子はナス嫌いだった。うちの米ナスをたべてもらったら「美味しい!これはナスではない。もしこれがナスなら今まで食べていたナスはナスじゃない」河野さんはシ

イタケ名人で、県の品評会で優等賞を獲得しただけでなく、河野式シイタケ栽培法を偶然に見つけ出し「皆で美味しいシイタケを沢山生産すればよい」と仲間に惜しげもなく伝授したとのことだった。

おふじへの川筋には柵田数枚だけの小さな井堰が連続している。隣の空木集落の尾根上には、江戸時代末期に築造された空木峠池がある。田染荘全体の水供給が安定するようにと作られた。池に水を集めるため、周りの森にはたくさんの小さな水路が張り巡らせていて、細い尾根を幾つも越えてこの池に水が送られているとのことだった。少ない水を賢く利用する工夫だ。さらに、水路トンネルも見学した。江戸時代の鉱山技術を転用して作られ、水の届かない台地上の集落下を抜けたところに、新田開発された場所もあった。

井堰からの水路はいくつにも枝分かれしていくが、どの水路にどれくらいの水を分けるかを決定するのは水守さんだけだ。水争いは個人間では収まらない。信頼できる水守を全員参加の寄合で全員一致で決めて、その人物の水管理の経験と公平性に託すシステムになっているとのことだった。できるだけ平等に水を分けるのが原則だが、ひどい旱魃時の水配分をみると遠い昔の水田開発時の経緯が習わしとして浮き出ることもあるとのことだった。

櫻井さんを最初に訪ねたときに「何を見ますか？水路と田を主題にして田染荘を踏査しましょう」と提案された。現場に出るときには必ず被る麦藁帽子が櫻井さんのトレードマークだ。宇佐市にある県立博物館から県庁所在地大分市に転勤されてからも、私たちの研修旅行の講師を務めてくださった。最終研修旅行となった2022年の旅の最終日に、櫻井さんは忙しい合間を縫って最後の解説をしていただいた。「武蔵の研修旅行での現地踏査と解説は、学芸員としての自分の原点だ」とのこと、誠にうれしい言葉だった。

9 国東市の研修地

農業の今の方でも大きな旅の形の変更を行った。交流開始以来、研修で対応してくれている長廣正光さんたちの負担も少なく、でも交流が深まるにはどうしたら良いか？長廣さんから「丸小野から離れた場所でなく地区公民館に泊まりなが

ら、農業体験をしたらどうか？朝食は我が家で食べればよい」とのありがたい提案があった。研修先に負担が少なく、豊かな交流と濃密な農業体験を実現するため最大数を8人とすることになった。

朝6時、寝泊まりしている公民館のサイレン塔から流れるチャイムで起床し、7時半にはお隣の長廣さん方で朝食を食べる。2人から3人ずつ、長廣さんともう1人のねぎ農家横山克巳・涼子夫妻とブドウ農家都留一真さん一家の3箇所の作業場で、農業体験を行い、作業中に多様なお話を聞くというスタイルとなった。

午後には、農家の食であったうどん打ち、餅つきと草餅作り、ねぎ餃子などを学生たちが自分たちで料理して、夜は土間で手料理とイノシシ肉と海の幸を市役所の方々と食べながら、交流を深めるという形に落ち着いた。長廣さんご一家のおもてなしに甘えることになり誠に感謝、学生たちもおばあちゃん、おじいちゃんの家に来ているみたいという安心感をもたらしてくださった。

横山さんは大都会でキャリアの最中にねぎ農家へ転身した方である。2017年のレポートには「横山さんがネギを栽培しようと思ったきっかけが知りたいと思い、お聞きしたところ、実は偶然日経ビジネスの大分特集の欄に「農業しませんか?」という言葉を発見したこと、ネギは季節に関係なく周年栽培が出来ることを理由に新幹線の中で決めてしまったそうです」と記録されている。

都留さんは、かつて減反政策が進む中、蜜柑栽培がブームとなってやっとこれから収穫という時期になったら、オレンジの自由化、全国での過剰生産が重なって蜜柑では生計が成り立たない中、ぶどう栽培に取り組んだ。全国一の高品質、岡山のぶどう生産農家で技術習得研修を行ったが、どんな技術も惜しげもなく教えてくれて驚いた。しかし、いざ国東という風土の中で取り組むと知識では乗り越えられず、風土にあった栽培方法を自ら確立していくしかないと覚悟を決めたとのことだった。武蔵町での農業研修では、このような歴史的な社会経済の激変のなかで毎年対応を重ねてきた一人一人の人生に接することができた。

九州地方は初めてという学生も多く、研修前後に別の旅を組み込むように勧めた。大分空港に現地集合、現地解散とした。郷土料理、グルメではなく風土に根差した食を味わうことは、研修旅行の柱であった。

到着後まず訪れるのは唐揚げ花ちゃん、花木展洋さんの名前から付けられた店である。店というかトレーラーハウスが調理場兼販売所で、予約客が次々訪れる人気店だ。大分県は鳥肉消費量が日本一でとり天や唐揚げはソウルフードだ。武蔵町にも幾つも専門店がひしめき、それぞれ独自の味付けで、子どもと一緒にあの店、酒のつまみはこの店と食べ分けているそう。鳥の各部位を余すことなく食べるメニューが並び、揚げたてをほうばりながら、花木さんの唐揚げへの思いを聞き書きした。暖かくそして美味しく武蔵大学生を迎えてくれる花木さんの

心使いに、皆こんな感じで研修が続くんだと安心感を与えてくださった。店内に掲げられた7万人目のお客さん写真はこの研修旅行の先輩たちだった。初日の夕食は、決まって国東の居楽屋ほろほろさんを訪れ、オランダという不思議な名前のメニューや豊後水道の地魚などで歓迎してもらった。

毎年の定番訪問地は萱嶋酒造である。米の利用といえば酒であり、酒造りと米栽培は切ってもきれない関係がある。学生レポートには「萱嶋酒造さんは明治6年に酒造りを始めました。日本酒「西の関」で有名です。「西の関」は明治20年代に2代目が西日本一のお酒にしたいという望みがあり命名されました。「西の関」の原料米は、地元の県産米の「ヒノヒカリ」をメインで使っている」と記録されている。国東の中心両子山から染み込んだ良質の地下水を地下80メートルから汲み上げ酒づくりがなされている。

国東市役所の近くには安国寺遺跡がある、西の登呂遺跡、東の安国寺遺跡といわれるほど、弥生時代の著名な遺跡である。復元住居も多数あり、高床の家に登って家中に座ると日本は瑞穂の国という長い歴史を感じとることができる。鏡と銅鐸を溶けやすい金属で作る体験もあり、古代人が初めて金属光沢を知り、金属音を聴いた感動と驚きを追体験できた。

七島蘭栽培農家松原さん訪問も大切な研修要素であった。畳といえば蘭草を思い浮かべるが、昭和30年代までは七島蘭だった。生産組合のサイトでは以下のように歴史を述べている[9]。要約すると、江戸時代杵築藩は3万石程度の小藩だったが、七島蘭の収益で10万石ほどの財力があつた。その後、明治、大正、昭和も七島蘭は大分の特産として全国に行きわたっていた。昭和10年には1,600ha、戦後の昭和31年は1,500ha、500万枚程度生産していた。現在の伊草産地熊本の八代市でも年間400万枚程度である。その後、生活様式の変化や農業を取り巻く環境の変化などで衰退していった。消えゆく七島蘭を復活させたのが松原さんである。国東の七島蘭は世界農業遺産の構成要素として評価されている。

七島蘭は琉球列島原産のカヤツリグサ科の植物である。3角形の断面を持ち、この茎を2つに割いて乾燥させ、畳表に加工される。昭和時代の古い道具で割く体験をした後、機械に束を入れ込むと、一瞬に多量に吐き出されてくる。かつて

は割く作業を夜中まで、翌朝は天気急変を気にしながらの海岸での乾燥作業、また収穫の繰り返しだった。夏の盛りの重労働、子どもたちも総動員で、お駄賃でアイスクリームをかうのが楽しみだったと昔話を聞いた。

世界農業遺産指定を推進した林さんたちが運営する七島蘭学舎の近くには、三浦梅園記念館がある。いつが梅の見頃ですか？という電話もよくかかってくるそうだが、江戸時代の哲学者三浦梅園の業績を紹介する施設である。浜田学芸員の解説のなかで、心に残った言葉が以下のように学生レポートにまとめられている。「一つ目は、「学問は飯と心得べし。腹にあくが為なり。かけ物などの様に人に見せんずる為にはあらず」という言葉だ。現代語に直訳すると「学問は飯と心得よ。空腹を満たし、自分の血や肉にするためのものである。床の間の掛け物の様な人に見せるためのものではない。」である。学生にとっては、ぐっとくるものがあった。学問も捉え方、考え方によっては、面白くなるものだと実感した。二つ目は、「華を識らんと欲せば先ず華譜を繙かんよりは急ぎ華圃へはしれ」という言葉だ。現代語に直訳すると「花を知ろうとするなら植物図鑑を調べるよりは花畑に行つて直接実物にあたるべきである」この研修旅行、フィールドワークの目標といえる二点である。

里の駅むさしも重要な研修場所である。大分空港の隣に位置する国東市の農産品を販売する道の駅である。農産品をいかに販売するかを探求し続けている店長藤原孝義さんから店に並ぶ生産者の名前が書かれた作物や加工品の特徴の説明を受けながら、消費者との関係について教えていただいた。講話の後、店内の食堂で、地元野菜をふんだんに使ったメニューがこの値段？と昼ご飯、食後にはアイスクリームも楽しんだ。

農業経験の全くなかった平山亜美さんが起業したウーマンメイク訪問も現代農業の一端を知る良い機会となった。莫大な初期投資を伴うコンピューター制御の水耕ハウス栽培で野菜を生産する会社だ。天気に合わせて仕事をする必要はなくなり、安定供給にもつながり、女性がストレスなく働ける環境を作り出していた。こねぎの水耕栽培を推し進めてきた上原隆生さんが師匠とのことだった。

国東半島北部のベトロ・カスイ岐部を紹介する国見ふるさと記念館も大切な場

所である。国東半島生れの彼は、日本を離れインドのゴアから陸路、日本人で初めてエルサレムを訪れ、ローマへ到達し司祭に叙階された[10]。厳しい禁教の時代に日本に帰国し殉教した。

国見では中野伸哉さん一家が営むラ・パロマ工房も訪れた。中野さんのお話から「私は自分の物事に対する接し方がいかに閉ざされたものだったかを痛感した。今後私も経験を積んでどんな角度からでも物事を捉えられるよう努力し、自身の経験を最大限還元できるように行動していこうと強く決心した」とレポートに記されている。

研修場所として忘れてならないのが国東市長の応接室である。三河市長を表敬訪問し、結構長い時間を割いてくれることが多く、時には30分を越えることもあった。その後、市役所でふるさと応援隊の方々と意見交換会、なぜ国東へというお話と、応援隊の実情を教えていただく交流会を設けた。地方移住の一つの型を具体的につかむ機会となった。

何よりもこの研修が継続できたのは、歴代の市役所の担当の方々のお陰である。1年ごとに変わることもあれば、数年継続してくださることもあった。中でも武蔵町時代から何かにつけお世話になり、国東に深い人的ネットワークを持っておられる都留英基さんは、新たな研修場所を次々提案してくださった。武蔵大学卒業後、国東市役所に勤めている岩武恒希さんは、長廣さん方での交流会には毎回同席してくださった。

武蔵町に移住して長い越名秀樹さんは、毎回私たちの研修をサポートしてくださった。手作りの歓迎横断幕を手に、空港で出迎えてくれた。そしてもう1人、この研修旅行に2年連続参加し、さらに卒業論文フィールドワークの地が国東で、卒業と同時に国東市役所に職を得た古谷風沙さんは、最後の研修旅行で一緒に旅をした。2022年レポートに「人生のターニングポイント」というエッセーを投稿してくれたがその最後は以下のように締めくくられていた。「やりたいことが決まってないし、何になりたいかわからなかった私」に、なんでもできてなんにでもなれることを教えてくれた大切な研修。次は私がなにかしらの形でつなぎ、返す番だと強く想う研修期間だった。

10 宇佐、安心院の研修地

田染荘での研修に加えて宇佐市安心院地域への拡大を指導して下さったのが松木郁夫さんである。今では全国に沢山ある農家民泊の始まりは安心院だった。激しい過疎と少子高齢化のなか、農村の新しい試みとして、話し合いを重ね、旅館業法を改正して実現した新しい宿泊形態だった。この農家民泊という形を推進してきた行政側の中心人物松木さんが、農家民宿の草分けである中山ミヤ子さんを紹介して下さった。

彼女の経営する舟板昔話の家では、絶品の鳥飯おにぎりを食べ、手際よく生きたドジョウの唐揚げ料理をしながら、人生を振り返って下さった。中山さんたちのグループが、農家民宿を立ち上げるにあたって、その先進地ドイツへ初めての海外旅に出かけた。よくありがちな行政主導で渡航資金を提供されるのではなく、ゆいみtainなグループの積み立資金で代表を送る形にした。ドイツで目から鱗だったのは、農家民宿は妻の仕事、農業は夫の仕事と明確に分かれていた。女性の創意工夫で何でもできるのだと納得して民宿事業を始めた。農村における女性の地位尊重と女性の経済的独立の2つが、過疎に立ち向かう肝だとのことだった。

宇佐市院内には74もの石橋があり、その代表が「石橋の貴婦人」鳥居橋である。阿蘇山噴火の火砕流堆積岩が作りだした深い小渓谷という地形特徴を克服した知恵の塊である。平田井堰が潤す宇佐平野に比べて大分県立博物館のある駅館川東側台地は約20メートルも高くこの台地へ水を引くには、駅館川の上流山間部から和尚山の山腹に長い水路トンネルを掘らざるをえない。1751年から開始された水路工事を百年余年後1870年に南一郎平らの努力で完成をみた[11]。松木さんの案内で、山腹の広瀬井路の水路トンネルを対岸から見ながら、南一郎平は明治の三大疎水、安積、那須、琵琶湖に関わり疎水の父と呼ばれていることを教えていただいた。

安心院はワインの名産地として名高い場所である。国主導で行われた大規模ブドウ畑整備事業の開発地とその後の実情を見せていただいた。安心院ワイナリーでは、評価の高いワインがたくさん並べられ、学生たちもお土産を買っていた。売店には中野さんがプロデュースしているプロジェクトのポスターが張られていた。

安心院には明治から大正にかけて左官の技鍔絵が沢山残存していて、鍔絵通りと名付けられている。レポートには「はじめのうちは市松模様などのシンプルな模様を施すのみであったが、次第に建物の戸袋や壁などに絵を描くようになっていったのだという。壮麗な鍔絵は左官職人の遊び心の表れであると共に、鍔絵を施された建物の家主のステータスを表象するものでもあったそうである」と記録されている。

安心院では佐田の反射炉も訪れた。「幕府の資金援助や技術供与を受けることも無く、民間で初めて建造された反射炉は、炉の完成から2年あまりの間に6ポンド砲4門、12ポンド砲2門、18ポンド砲2門の鑄造を成し遂げたとされています。また佐田で鑄造された大砲は、島原藩のみならず佐伯藩や日出藩にも配備され、賀来家の大砲鑄造技術は遠く鳥取藩まで伝えられました」と紹介されている[12]。溶けた耐火煉瓦を壁に転用した場所を前に行くと、江戸時代末期に日本各地で新時代への転換を推し進めた人々の熱気を感じることができた。

江戸時代の人気スポット、桂昌寺跡地獄極楽は、水路トンネルのところでも触れたが、鉾山トンネル技術を応用した洞内巡りの場所だった。地獄エリアから天国エリアへと抜け出る仕掛けとなっていて、ろうそくの光だけをたよりに這いずるように巡り、願をかけた人々の思いの一端を感じることができた。名勝地仙の岩は阿蘇凝灰岩の断崖で、田染荘の三宮の景より少し小ぶりの風景だった。郷土料理として宇佐の人気店菊水でハモと豚しゃぶをお皿に山盛りの大分味一ねぎと一緒に食べた味も忘れられない。

最終旅では宇佐航空隊飛行場跡地などの戦跡を巡り、掩体壕に隣接した宇佐海軍航空隊神風特別攻撃隊の碑の前で松木さんからお話をうかがった。宇佐航空隊から出撃した、艦爆隊49機61名、艦攻隊32機93名、計81機154名の名が刻まれていた。多くが学生たちと同じくらいの年の青年たちであった。

11 参加学生の研修後レポート抜粋

各年度の学生レポートはそれぞれ興味深く、多様な学びを得たことがわかるものだった。数行ずつ取り込んで羅列するよりも、数人を選んで、長めに引用する

ことで、研修後レポートがどのようなものであり、旅を終えた学生の感慨などを知っていただきたい。

参加後レポート 学生1

私は今回で2年目の国東半島農業研修参加となりました。しかし昨年と大きく違う点がありました。それは旅をともにする仲間が全員同い年で、さらに3学部が全て揃っていたということでした。今年の春の顔合わせ時に自己紹介をした時は「何の偶然だろうか」と思いました。そして同時に、「昨年とはまた違う、面白い旅になるに違いない」と思いました。

今年の5月から7月にかけて、6人の研修参加者は2人ずつの3チームに分かれて研修前の事前学習をしました。過去3ヶ月分の全ての新聞の朝刊と夕刊をめぐり、2人で手が真っ黒になるまで農業関連の記事を探したり、江戸時代の村の掟について書かれた本を探してレジュメにまとめたりして、各チーム発表しました。ほとんど同じテーマで調べを進めていたはずなのに、着目点やまとめ方にそれぞれ学部の「らしさ」が見えてきて、自己紹介以上に個々の人柄が表れてくるのが面白かったです。

そして9月1日の研修初日がやってきました。今年は飛行機に乗るまでの手続きも慣れていたので、研修の本編以外での余計な不安はなく、体調も安定した状態で初日を迎えられました。その後の研修中は前回来たときのような初回独特の不安混じりの興奮がない代わりに「冷静に楽しむ」ことができました。前回の研修で大枠をつかみ、今回の研修ではそれぞれの場所で聞く話や見るものの細部に目を向けることができました。何よりも研修先で会う方々の名前と顔が一致していたことが安心でしたし、再会を楽しむことができたのが嬉しかったです。「今年は体調大丈夫なの。」「昨年も来ていましたよね。」など、再会した方々からかけていただいた言葉の一つ一つに安心させられました。声をかけていただいた方々、本当にありがとうございました。

また、車で通る道の左右に昨年までなかった店が新たに増えていたり、国東市PRマスコットキャラクター「さ吉くん」が昨年よりも町での活躍の場を増やし

ていたり、町が少しパワーアップしたところを見ることができたのが嬉しかったです。

さらに今回の研修ではたくさんの美しい自然に出会えました。研修4日目は昨年よりも天候に恵まれ、空木峠池で朝の清々しい空気をいっぱい吸い込んだり、朝日観音・夕日観音から夕日に照らされた田染の田園風景を見ることができたり、またそれらの風景を仲間と共有できたというのも私にとっては大きな喜びとなりました。

この研修は、部活やサークルに所属していない私にとっては「国東部」と呼びたいほどの楽しい、かけがえのない時間となりました。私達の研修のために貴重なお時間を割いてくださり、たくさんの「その道」のお話をお聞かせいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

参加後レポート 学生2

研修中の美味しい食べ物に舌鼓をうち、気づいたところに体重計に乗ってみると東京にいたときより3キロ以上太っていた。美味しい食べものの記憶は今でも鮮明だ。この研修旅行の醍醐味のひとつとして、「食べること」があったが、もちろん食べるためだけに大分まで訪れたわけではない。現代の「農」を知る。これが私たちのねらいだ。ただ私は、たった四泊五日の訪問で農業を知ることができるのか疑問に思っていた。事前学習として何度か現代農業のことを調査し、いくらかのデータ上あるいは記事上の出来事を確認することができたが、実状はどうなのだろう、と。また、研修事前レポートにも記述したが私は個人的にも「農」について生産者の心のうちを知りたいと感じていた。研修を終えた今、改めて農業を知ることができたかという、期間が短く、おこがましくてあまり首を縦に振ることができない。しかし、思っていた以上に農業に対しての意識が変わったのではないかと実感している。

まず「農業は自然ではない」こと。あまりに常識で、つまらないコメントかもしれないが、私にとっては大きな気づきであった。何種もの雑草が生えた土地を耕し、作物を植えて管理する。これらの作用のなかに人間の手がいくつ介入した

だろうか。答えはすべてである。道の里で出会った藤原さんのお話のなかには「塩害」「発酵化」、桜井さんのお話では「台風で運ばれてくるウンカ」「降水量の少ない気候」と、自然から起こされる様々な農業への影響が語られてきた。そうして私はやっと農業が自然にできるものではないと気づく。自然と共存している印象の強さから、私は農業を勘違いをしていたのかもしれない。自然と戦い、また自然をころさず（地形を生かした棚田など）、自然と暮らす姿が心に残った。

次に消費者を常に考えていること。私は都留一真さんのブドウ農園にお邪魔して農業体験を受けた。そこで収穫されたブドウの調整作業をするのだが、食べられそうな実も形が悪ければ切ってしまう。食べられそうな、というより食べることができる、というのが正しいのだが、そうして切られた実はすぐ廃棄にはならないが、消費者に届くこともない。消費者が買う前、食べる前、ブドウの何を見るか、とたずねられたらやはり一粒の大きさと大きい粒の入っている量だろう。また別の体験先であるネギ農家の横山さんへ訪れた友人は、ねぎの皮を剥ぎ、最終的には2本だけの状態にするネギの調整作業を経験し、食べられるところなのにもったいないと感じていた。すべては消費者のため、出荷する前に行なう農家さんの努力をわれわれは見た。

自然と闘い、消費者と戦い、またそれらとともに生きていく農業。真の農業とは、と語るつもりはないが、農業は生活と仕事と自然が組み合わせり充実した職業であると感じた。

今回大分の「國の光を見る」観光ではなく、いたるところを隅々まで問いかけ知識を得ていく旅として訪れることができて大変満足している。それは農業だけではなく、今まで訪れたことのなかった大分をこの四泊五日で満喫したからである。から揚げにお酒、いろいろな料理を食べ、農家さんに公務員さん、色々な方と会話し、さらに詩吟を聞き、息ができないほどの蚊取り線香、普段経験しないことを毎日驚きつつ体験した。そしてこの体験談は東京に帰った後でもたくさんの人と繋がれることに気がついた。「どこに行っていたの?」「大分です」「ああ、別府温泉?」「いいえ、国東半島です!」このような何気ない問いかけから国東のことを話せることがうれしく、やはりこの身で大分の魅力を感じ取れたことが

一番の要因であると考えます。丸橋先生に出会い、国東半島農業研修旅行に参加することができて本当に良かったと感じています。

参加後レポート 学生 3

今回の国東半島農業研修では様々な景色を見、色々な方と出会い、お話を伺う中で、多くのことを学ぶことが出来た。私は自然との関わり方を学び、また今後の人生について改めて考えるためにこの研修に参加したが、当初の目的以上に得るものがあったと思う。

まず学んだのは、自然についての考え方である。私は手つかずの自然というものに漠然とした憧れを抱いており、研修参加前は山や川などの大自然の中で研修期間を過ごすものだと考えていた。しかし実際に平田井堰や水路管理の行き届いた水田などの現地の風景を観ていく中で、私が「自然」と聞いて漠然と思い浮かべていたもののあらゆる所に人間の知恵や技術が息づいていることを知った。私はそれを残念だとは思わず、むしろ美しいと感じた。山と森の草木や河川、更に昔の人々が生きていくために生み出した地形や設備。それらが美しく調和した風景こそが日本における「自然の風景」なのだろう。

また研修では、小ねぎ一筋 40 年の長廣さんや出産をきっかけに水耕栽培の会社を立ち上げた平山さんをはじめとした農家の方々や、国東に移住して七島蘭農家の後継者になった方、学生としてこの農業研修に参加したことをきっかけに現在は移住して国東で働いている武蔵大学卒業生の方など、本当に様々な人からお話を伺うことが出来た。その中で、フットワーク軽く様々なことを体験していくことが大切なのではないかと思った。無論それは好き勝手にやっていいということではなく、その時その時で自分に出来ることを精一杯やらなければならないだろう。

私は動く前にあれこれと考えてしまい結局何も出来ないことが多い。しかしこの研修を経て、若いうちに様々なことに興味を持ち、フットワーク軽くあらゆることを体験していきたいと思った。そしてその中で、研修で出会った人たちのように自身にとって譲れないもの、大切なものを見つけることが出来たらと思う。

私がこの研修で特に印象に残っているのは、七島蘭農家の松原さんの作業場での体験である。収穫した七島蘭を、昔ながらのピアノ線を使った器具と現在使われている機械の両方を使って割く体験をさせていただいた。機械には七島蘭の束をセットするだけでよく、あっという間に綺麗に割けた七島蘭の山が出来た。しかし私はピアノ線を使った昔ながらのやりの方が好みだった。ピアノ線を通して七島蘭が割ける「ビィー」という音を聴きながら、ひたすらに作業を進める。自分はこういった黙々と打ち込める作業が好きなのだと気付いた。

しかし、現在では機械を使った作業が主であり、ピアノ線を使った器具はほとんど使われないのだという。機械化により作業がより早く楽になるのはとても良いことだと思う反面、少し寂しさを感じた。七島蘭は国東独自の生産物であり、今回の体験は研修に参加しなければまず出来なかったであろう。改めて、機会を与えてくださった松原さんご夫妻にお礼を申し上げたい。また、松原さんの下での体験の後に作った七島蘭で編んだミサンガは、この研修での宝物である。

また、この研修では学年も学部学科もバラバラな学生さんたちとも親交を深められた。学年は私が一番上であったが、皆気兼ねなく話してくれてとても楽しかった。この研修に参加したメンバーも含めて、最後に、研修を主導してくださった丸橋先生をはじめ、研修で関わった全ての人たちにお礼を申し上げたい。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

12 まとめ

タイトルに込めた四つの要素、国東、農、今、歴史をどんな風に組み合わせるか？その組み合わせにふさわしい研修場所はどこか？毎年考え訪ねることで、私にとっては毎年新しい国東旅であり貴重な研修だった。何よりも、研修で出会った国東の方々の知識と懐の深さのおかげである。

フィールドワークには二つの型がある。一つは自らがテーマを定めて調査や研究のため幾度も訪れる型、もう一つは、引率者が初めての参加者を案内し学びの端緒をつかむ型である。後者の旅が豊かなものになるためには、三つの鍵となる事柄がある。

一つ目は、研修地が旅のテーマに合致し、歴史的にも、文化的にもフラクタルな広がりがある地域であること。二つ目は、引率者が何度も訪れ、現地の方々と繋がりをもつことを続けていること。三つ目は、参加する学生たちが、強い動機と深い関心を持って参加し、共に参加できて良かったと思い、家族や友人に「楽しかった」「参加してよかった」と語れる体験となることである。

四泊五日間という旅の長さも大切や要素である。参加者からは、初めての長旅で不安だとの声があるが、終ってみると、もう少し長めでも良かった、まだ見残している事柄がたくさんあると実感できるように工夫してきた。「今年は昨年のレポートにあった訪問地には行かないのですか？」たくさんの訪問地を次々開発し、新しい訪問地と定番の研修場所とを組み合わせることも大切である。何よりも引率者自身が毎年の訪問で、現地の方々と新しい訪問地を考案し、開拓していくことが肝要である。日本中どこでも、深い文化と歴史と人の営みが堆積しているのだから。

旅での共食も大切である。食体験では、うどんをこねたり、餅をついたり、ネギ餃子を包んで、夜の懇親会のメニューを自分たちが準備する。臼と杵で餅つきなど、手慣れた技を見よう見真似で、現地の先達たちとおしゃべりしながら教わる。仮想ふるさとの雰囲気を保つよう対応してくださった皆さんに感謝である。食材も裏の畑から自分で収穫し味わい、都会のスーパーの野菜と比較してみる。これくらいの広さの畑で、たくさんの夏野菜が採れるという現場感覚が大切である。農家の土間や軒先で、共に料理し、共におしゃべりしながら味わうという、初めて出会う学生同士が仲間になるプロセスの場を提供していただいた。

毎年のレポートを出版することは研修旅行が継続するための最も大切な鍵である。新しく参加する学生にとっては、これまでに参加した学生がどんな風にこの旅を楽しみ、学んだかを知り、強い参加動機を得る端緒となるからである。そのため、参加後レポートには1200字以上を求め、書くことで振り返りの時間を確保し、言葉を紡げる分量としてきた。同じ体験をした直後の参加レポートを読み合うことで、11月の白雉祭での協力意識が深まる効果があった。最も大切なのは、レポートを送付して目を通していただいた現地の方々が、彼らはこんな風に現地

での出会いから学んでくれたのかと納得感を持っていただけのも長く継続できた大切な要素だったと言える。

昨年武蔵での37年間の教員生活を終えたところである。この10年ほど抱えている危惧がある。かつては、演習やゼミによって、例えて言えばマヨネーズが出来上がっていた。卵と酢と油をうまく混ぜ合わせると分離することなく、混ぜることによって新たな味わいと一体感を醸し出していた。しかし、今は、分離してしまうドレッシングの感が否めない。混ぜている間はドレッシングなのだが、終わってしまうと直ぐ分離してしまうイメージである。学生同士が交流し合い高め合う雰囲気下がっていると感じている。

「共有地の悲劇」の進行、負のスパイラルが進行している気がしている。話し合う、深め合う、協力し合うために、各人が最大限努力するというゼミの基本枠組みが弱体化している印象がある。最小努力で授業単位を取得し卒業できれば良いという風潮が広がり、皆も努力しないなら自分も努力しない、こうして、武蔵への愛着と誇りを持てないまま、失望へと変化しているのではなかろうか？

さらに、ネット社会が進展し、かつてのように子どもは小さいうちは家族と学校の2つだけだった時代が過ぎ去り、ネット社会やSNSといった新たな第3の社会環境下で育つようになった。その上、家族と学校は、こどもが育っている第3の社会環境を直接知らない、理解できないことも増えていつている。今年2024年のノーベル賞はAI時代を先取りするかの受賞者たちだった。

大学の機能や役割が激変していく時代にあって、何をなすべきか。それは現場体験、フィールドワークを通じた学びであると確信している。教員と学生がともに旅をして学ぶフィールドワークを大学教育の中、それも入学直後の1年生の間に多様な教育プログラムを展開して欲しいと願っている。研修旅行10項目を列挙したが、参加学生100名足らずではあるが、学びに幾つかの種を播き、芽生えていることをうれしく思う。

13 引用文献とサイト

1. 『武蔵町の民俗』 大分県国東半島. 武蔵大学人文学部日本民俗史演習編.
武蔵大学人文学部宮本研究室、2006.
2. 環境白書「平成 14 年度環境の状況に関する年次報告」(2024.10.24 閲覧)
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/h15/13413.html>
3. 宇佐市、世界かんがい施設遺産 (2024.10.24 閲覧)
<https://www.city.usa.oita.jp/sougo/soshiki/13/kochi/kangai/16813.html>
4. クスギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環(2024.10.24 閲覧)
<https://www.kunisaki-usa-giahs.com/>
5. 文化庁、文化的景観 (2024.10.24 閲覧)
<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/>
6. 宮内庁、第 1 回アジア・太平洋水サミット開会式における皇太子殿下記念
講演 (2024.10.24 閲覧)
<https://www.kunaicho.go.jp/okotoba/02/koen/koen-h19az-mizusummit.html>
7. 『六郷山と田染荘遺跡－九州国東の寺院と荘園遺跡－』 櫻井成昭、同成社、
2005
8. 豊後高田市、「島原藩領田染組村絵図」が県指定有形文化財に指定されま
した！ (2024.10.24 閲覧)
<https://www.city.bungotakada.oita.jp/site/bunkazai/2260.html>
9. 国東七島蘭振興会、七島イの歴史 (2024.10.24 閲覧)
<http://shitto.org/history.html>
10. カトリック東京大司教区、ベトロ・カスイ岐部神父 (2024.10.24 閲覧)
<https://tokyo.catholic.jp/history/martyrs/kibe/>
11. 宇佐市、世界かんがい施設遺産 (2024.10.24 閲覧)
<https://www.city.usa.oita.jp/sougo/soshiki/13/kochi/kangai/16813.html>
12. 佐田まちづくり協議会、佐田の名所反射炉跡 (2024.10.24 閲覧)
http://www.oct-net.ne.jp/sada_m/p05/p05_013.html

14 資料 研修旅行参加者と集合写真、QRコード

1. 2005年：伊藤有希子、岩川藍、古屋美紀、大河内優子、小池里美、日橋こずえ、佐藤美乃里、芹沢麻美、中嶋美沙子、安野文子
2. 2006年：牟田悦子、鈴木さとみ、今田洋行
3. 2007年：島田清史、網川恵美、小島佳菜恵、宮原有可、勝山真一、東山美紗子
4. 2008年：高根沢香織、市川拓也、小原実歩、前川明日香、川野恵美、鍋谷めぐみ、須藤緑、渡邊千慧、吉岡美沙、石王丸友希恵
5. 2009年：古賀優稀、三国弘樹、上田真利那、岡村恵実、西村みのり、網川恵美、津田雅勇
6. 2010年：川尻さとみ、亀井ちひろ、高橋まり、山田寛恵、中村ひとみ、成田羽、山本由紀、加藤真己
7. 2011年：黒川智貴、小倉里菜、大上亜梨沙、丸野裕介、高橋まり、ラム・レベッカ
8. 2012年：中村英里奈、藤原理代、高浜佳未、人見千瑛、加藤雅大、青木昂平
9. 2013年：松山未来、戸田浩一郎、三原佳実
10. 2014年：杉本頑仁、太田葉奈子、小山美里、深山泉、木谷英一、廣田千佳
11. 2015年：山口杏平、太田葉奈子、田中葵、檜木美雪、野寺由夏、島崎加奈子
12. 2016年：木下堇、新井菜月、柴理香子、中嶋美和、松澤美柚、田村彩百合
13. 2017年：平野后久良、乳井優花、岡田梨沙、並木惇也、渡戸佳乃、古谷風沙
14. 2018年：石井海道、木村渉吾、山崎智裕、古谷風沙、新井麻衣子、渡部杏子、落合和希
15. 2019年：砂田美優、佐伯麻弥、納富泰一、坂本拓朗、吉田朱音
16. 2022年：横田仁、大河原花、渡戸貴臣、大久保和花、石平青、波多野結衣、若菜絵莉、松熊つばさ

各年度の集合写真



2005 年



2006 年



2007 年



2008 年



2009 年



2010 年



2011 年



2012 年



2013 年



2014 年



2015 年



2016 年



2017 年



2018 年



2019 年



2022 年

各年度の研修レポート pdf 版への QR コード

以下は各年度の国東農業研修レポートの PDF 版である。ファイルサイズが非常に大きい場合のある点を考慮して閲覧してください。既に印刷、関係者に発送したレポートだが、過去レポートを閲覧したい、散逸してしまったという要望に応えるためでもある。なお、写真や文章を無断で複写、転載不可。



2005 年



2006 年



2006 年補遺



2007 年



2008 年



2009 年



2010 年



2011 年



2012 年



2013 年



2014 年



2015 年



2016 年



2017 年



2018 年



2019 年



2022 年

15 資料 武蔵町と武蔵大学との交流史

15.1 第1期 武蔵サミット形式での武蔵大学と武蔵町の交流

● H3 (1991 年)

－ 11 月 武蔵町との交流の始まり

大分県開催の全国生涯学習フェスティバルで正本秀雄武蔵町長と武蔵大学人文学部林義樹教授が同席し、同じ『武蔵』ということで交流がはじまった。

● H5 (1993 年)

－ 夏 武蔵大学の教職課程学生が「町おこし」をテーマに調査活動

－ 11 月 正本秀雄町長と桜井毅学長が懇談し本格的な交流が始まった。

● H6 (1994 年)

－ 3 月 4 日

第1回武蔵サミット 於：武蔵大学

武蔵町と武蔵大学との初の交流。開催日を『6.3.4』ム・サ・シとした。

『武蔵』の名にゆかりのある、全国の個人、諸団体、企業等の参加。以後、大分県武蔵町、武蔵工業大学同窓会と本学とで毎年交替で開催

豊田有恒氏講演：「武蔵という名はどこから来たか」

正本秀雄町長来校

－ 第1回武蔵サミット以降『全国武蔵会』が発足し、武蔵大学学長が名誉会長、川村学務事務次長が顧問となり、毎年1回全国的集まりをもって、友好を深めている。

● H7 (1995 年)

－ 3 月 25 日

第2回武蔵サミット 於：武蔵町

武蔵町の町制40周年記念開催

● H8 (1996 年)

－ 3 月 16 日

第3回武蔵サミット 於：武蔵大学

シンポジウム：統一テーマ「いま武蔵を知ろう！」

● H9 (1997 年)

－ 3 月 29 日

第 4 回全国『武蔵』のつどい（武蔵サミット）於：武蔵町

(1) 丹羽基二氏：「武蔵の起源について」、(2) 武蔵町内史跡等見学

● H10 (1998 年)

－ 3 月 28 日

第 5 回全国『武蔵』のつどい（武蔵サミット）於：武蔵工業大学

(1) 横浜キャンパス：シンポジウム『古代“むさい”へのタイムスリップ』、

(2) 世田谷キャンパス：歴史散歩

● H12 (2000 年)

－ 3 月 25 日

第 6 回全国武蔵の集い（武蔵サミット）於：武蔵大学

山田邦明氏「江古田・東京・武蔵国一地域から歴史を見る」

15.2 第 2 期 武蔵町と武蔵大学との文化交流事業・農業研修

第 6 回サミットをもって、武蔵町長より申し出がありサミット形式の交流はとりやめとなった。以後、武蔵町と武蔵大学は白雉祭での物産販売と、農業体験、民俗調査、なのはなマラソン参加など文化交流を進めることになった。

● H13 (2001 年)

－ 11 月 2 ～ 3 日

第 49 回白雉祭 武蔵町物産販売。白雉祭第 1 回参加

広報：父母の会会報、練馬区報、近隣新聞チラシ、大分合同新聞社東京支局・東京むさし会

3 号館中庭：ねぎ餃子実演販売と武蔵町物産（武蔵ねぎ、かぼす、きゅうり、みかん、銀杏、干ししいたけ、しいたけ佃煮みそ、わかめ、ひじき、花等）販売

大学の近隣住民に好評を博した。

魚返敬之町長、産業課成原氏 他職員 4 名、生産者 6 名

● H14 (2002 年)

－ 7 月 27 ～ 30 日

民俗調査第1回 宮本袈裟雄教授ゼミ（日本民俗史演習）

武蔵町（丸小野地区、手野地区、藤本地区）

宮本教授、学生 14 名、卒業生 2 名参加

－ 8 月 26 ～ 29 日

第1回農業体験

(1) ねぎ・花・ぶどう・椎茸生産農家で実習、(2) ボランティア：学童保育の補助活動（小学校のなかよし館）、(3) フリー討議：武蔵大生と農業後継者グループ、農作業体験受入れ農家の方々

文化団体連合会サークルの野良塾学生 18 名参加、野良塾：農業体験の報告書作成

－ 11 月 2 ～ 4 日

第 50 回白雉祭 武蔵町物産販売。白雉祭第 2 回参加

広報：練馬区報、新聞折り込みチラシ

魚返敬之町長及び産業課職員、生産者来校

白雉祭実行委員、模擬店の食材（野菜）を武蔵町から一括購入

● H15 (2003 年)

－ 7 月 28 ～ 31 日

民俗調査第2回 宮本袈裟雄ゼミ（日本民俗史演習）

武蔵町：松ヶ迫地区・池の内地区・三井寺地区・糸原地区・古市地区

宮本教授、学生 14 名、卒業生 2 名参加

－ 8 月 25 ～ 28 日

第2回農業体験

(1) ボランティア：古市海岸のゴミ拾い、(2) 農作業体験受入れ農家の皆さんと意見交換会、(3) 野良塾：農業体験の報告書作成

野良塾学生 20 名、武蔵大職員 1 名参加

－ 11 月 1 ～ 3 日

第 51 回白雉祭 武蔵町物産販売。白雉祭第 3 回参加

広報：練馬区報、新聞折り込みチラシ

魚返敬之町長及び産業課職員、生産者来校

(1) 夏の農業体験のビデオをテント前で放映実行委員、(2) 武蔵町生産農作物を白雉祭模擬店に使用、(3) 交流懇談会

● H16 (2004 年)

－ 3 月 27 ～ 29 日

なのはなマラソンに、武蔵大生参加 第 1 回目

武蔵大テイルウィンドクラブ代表：清水君 10 キロ、中野君 5 キロ 3 位

横倉学長、武蔵大学職員 2 名参加

－ 8 月 23 ～ 25 日

第 3 回農業体験

野良塾 27 名、武蔵大職員 2 名参加

(1) ボランティア：農村公園清掃、(2) 野良塾農業体験の報告書作成

－ 9 月 13 ～ 17 日

第 3 回民俗調査 宮本袈裟雄ゼミ（日本民俗史演習）

武蔵町：志和利地区・古市地区・狭間地区・麻田地区・内田地区・成吉地区

宮本教授、教員 2 名、学生 13 名

－ 11 月 5 ～ 7 日

第 52 回白雉祭 武蔵町物産販売 白雉祭第 4 回参加

広報活動：練馬区報、新聞折り込みチラシ

魚返敬之町長及び産業課職員、生産者来校、交流懇談会

－ 11 月 21 日

武蔵町合併記念式典出席（国東市制となる） 於：武蔵町セントラルホール

横倉学長、職員 2 参加

● H17 (2005 年)

この年が、合併する前の武蔵町と武蔵大学との最後の交流となった。

－ 3月19～20日

なのはなマラソンに、武蔵大生参加 第2回目

ティルウインド：櫻山君5キロ3位、森川君5キロ6位、武蔵大陸上競技

部：判君3キロ1位、北田君5キロ4位

横倉学長、武蔵大職員2名参加

－ 3月19（日）

音楽会開催 於：武蔵町セントラルホール

武蔵高中教員：梶取昌弘先生ご夫妻コンサート（武蔵町出身）

－ 4月9日

武蔵大学・武蔵町交流10周年記念植樹。交流10周年を記念して、武蔵町
と本学有志の寄付で朝霞グラウンドに枝垂れ桜（1本）植樹

横倉学長、宮本教授、武蔵大生：野良塾、陸上部、院生、職員4名

－ 10月28～30日

第4回農業体験

（1）ボランティア5館通り花壇草引き、（2）豊後高田「昭和の町」見学、
（3）農業研修報告書作成

丸橋学生部長、ゼミ学生10名参加

－ 11月4～6日

第53回白雉祭 武蔵町物産販売。白雉祭第5回参加

広報活動：練馬区報、新聞折り込みチラシ

高井正助役及び産業課職員来校、交流懇談会